

<論文>

特別教科（音楽）教員養成課程設置による

地方への音楽教員養成拡大

—新制大学への再編の中で—

鈴木慎一郎

The Expansion of Music Teacher Training in Locality by the Establishment of  
Special Subject (Music) Teacher Training Course:  
National Universities in the Postwar Era of University Reorganization  
SUZUKI Shinichiro

キーワード：特別教科（音楽）教員養成課程，地方，カリキュラム，東京芸術大学

Key Words: Special Subject (Music) Teacher Training Course, Locality, Curriculum, Tokyo  
University of the Arts

はじめに

本稿の目的は、戦後の音楽教員養成における、特別教科（音楽）教員養成課程が果たした役割の検討を通して、地方への音楽教員養成の拡大されていく実相を明らかにすることである。

戦前の中等音楽教員養成は、東京音楽学校が中核的な存在であった。私学では、武蔵野音楽学校、東京高等音楽学院（現、国立音楽大学）でも行われ（船寄 2005, p. 416）、その他、東京女子高等師範学校体育科でも免許状を取得できた（鈴木 2003, 2006, 坂本 2006）。このように戦前の音楽教員養成機関は、東京に集中していた（鈴木 2019, p. 212）。

初等教員養成機関であった師範学校は、新制大学昇格に伴い、中等音楽教員養成の機能も加わり、全国の各都道府県において養成が可能となった。このように音楽教員養成機関は増加したのではあるが、新制中学校の義務教育化、新制高等学校の新設等に伴い、教員は不足した（木村 1993, p. 64）。1950（昭和 25）年、教育刷新審議会は「優良教員の養成確保に関する対策」の建議案を採択し、教員養成機関の改善充実策の一つとして、「高等学校芸能科教員養成のための適切な施設を整備」することを挙げた（林 1971, pp. 418-419）。これを受け、1952（昭和 27）年、東京芸術大学と大阪学芸大学に特別教科（音楽）教員養成課程が新設される。その後、表 1 に示す通り、1953（昭和 28）年、山形大学、1954（昭和 29）年、島根大学、宮崎大学、1956（昭和 31）年、北海道学芸大学、1959（昭和 34）年、愛媛大学、1962（昭和 37）年、東京学芸大学、1965（昭和 40）年、新潟大学に設置される。

特別教科（音楽）教員養成課程に関する先行研究としては、上原一馬が挙げられる。上原は「東京芸術大学は内容も充実しているので問題はなかったが、大阪学芸大学は施設、設備、教授陣容も貧弱なため、その運営には多くの困難を伴った」と回想する（1988, p. 435）。

また、上原は各大学のカリキュラムや教員組織等を比較し、日本音楽や教育実習等にも触れ、実態を明らかにしている（1976）。しかしながら、紙幅の関係もあり、特別教科（音楽）教員養成課程の立ち上げに関する具体的な事例については触れられておらず、また、1976（昭和 51）年の現状報告であるため、その後の動向については当然ながら取り上げられていない。

2006（平成 18）年の東京学芸大学を最後にすべての特別教科（音楽）教員養成課程は廃止され、教員養成を主目的としない「新課程」に改組された。2015（平成 27）年、文部科学省は「国立大学法人等の組織及び業務全体の見直しについて」を通知し、第 218 回日本学術会議幹事会において「新時代を見据えた国立大学改革」について説明し、「新課程」の廃止を打ち出す。これを受け、「新課程」も廃止された。このような動向の中、特別教科（音楽）教員養成課程の総括は、戦後の教員養成史を補完するということだけではなく、今後の中等教員養成の在り方を構築する上でも欠かすことのできない作業である。さらに特別教科（音楽）教員養成課程の地方への設置は、音楽教員養成の拡大だけではなく、地域の音楽文化の波及の役割も果たしていたと考えられる。とはいえ、上原の回想にもあった通り、音楽室が 1 室と数台のピアノならびに数名の音楽教員しかいなかった師範学校が、専門的な音楽教員養成機関として整備されるに至るまでには、数多くの困難があったと予想される。そこで本稿では、特別教科（音楽）教員養成課程の萌芽の状況について丁寧に検証していきたい。

研究方法は、第一に東京芸術大学特別教科（音楽）教員養成課程の組織、カリキュラムの実相を明らかにする。第二に地方の新制大学教員養成学部へ設置された特別教科（音楽）教員養成課程の新設の経緯を明らかにする。

東京芸術大学を取り上げた理由としては、地方に設置された特別教科（音楽）教員養成課程の多くは、東京芸術大学のカリキュラムを参考にして、組織を立ち上げられたと推察されるからである。なお、類似した課程として、広島大学教育学部に高等学校教員養成課程が設置されていたが、本稿では直接の事例対象とはしない。

表 1 特別教科（音楽）教員養成課程

設置	大学	廃止	備考
1952	東京芸術 大阪学芸	1967 1988	特別教科教員養成課程、音楽教員養成課程、特設音楽課程 特設音楽課程
1953	山形	1992	特別教科音楽教員養成課程
1954	島根 宮崎	1999 1999	特別教科音楽教員養成課程 特別教科教員養成課程音楽学科、（高音）
1956	北海道学芸	1989	北海道大学教育学部→特設音楽課程
1959	愛媛	1996	特別教科教員養成課程音楽科
1962	東京学芸	2007	特別教科（音楽）教員養成課程
1965	新潟	1998	芸能学科→芸能科

表 1 の備考に示した通り、課程の名称は若干異なったが、1964（昭和 39）年、文部省は「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令」を公布し、これまでの独自の学科、課程名が統一され、「特別教科（音楽）教員養成課程」となる<sup>1</sup>。

設置の背景に関しては、東京芸術大学と大阪学芸大学については文部省の要請を受け、設置された。一方、地元の熱心な誘致運動が伴って設置されたのが、山形大学、島根大学、宮崎大学、愛媛大学であった。山形大学では地元から約200万円の募金（山形大学1999, p.399）、島根大学では750万円の募金を集め（島根大学2003, p.204）、楽器をはじめとした施設・設備費として活用された。特異なケースとして、北海道大学教育学部から再編されたのが、北海道学芸大学であった。その他、新潟大学は「芸能科」という特色のある学科を有していたが、上記の1964（昭和39）年の省令を受け、再編された。

なお、新制大学の発足に関して高等学校と師範学校と再編され、「教育学部」となったのは、山形大学、島根大学、愛媛大学、新潟大学であった。専門学校と師範学校と再編され、「学芸学部」となったのは、宮崎大学であった。単科の「学芸学部」となったのは、大阪学芸大学、北海道学芸大学、東京学芸大学であった。

本稿では、紙幅の関係もあり、まず東京芸術大学を取り上げ、その後、大阪学芸大学、北海道学芸大学、島根大学を中心に検討したい。

## 1. 東京芸術大学

『東京芸術大学百年史』の「年譜」を見ると、1955（昭和30）年4月には、以下の記載が見られる（東京芸術大学2004, pp.2-3）。

教職課程（教員養成課程）設置（邦楽科を除く）。入学定員は別枠で設け、各科に割り振ることとする。

翌年の1956（昭和31）年4月には、「教職課程（教員養成課程）の各科定員枠を廃止し、全体で120名とする」（東京芸術大学2004, p.3）と規定され、各学年30名の定員であった。1950（昭和25）年の「学則」において、音楽学部の組織は下記の通り規定される（東京芸術大学2004, pp.145-146, p.153）。

第九條 音楽学部に、左の学科を置く。

作曲科

声楽科

器楽科

指揮科

邦楽科

第四十三條 学生の定員は、左のとおりとする。

（中略）

音楽学部 528人

作曲科 40人

声楽科 200人

器楽科 160人

指揮科 8人

楽理科 80人

邦楽科 40人

第十條では、「教員を志望する学生は、前項の課程のほかに、所定の教職課程を併修する」と示される。なお、「前項の課程」とは、「一般教育課程および専門課程」を指す（東京芸術大学 2004, p.146）。1953（昭和 28）年、「学則」が改正され、別表の音楽学部履修表も改正され、1952（昭和 27）年 4 月以降にさかのぼって適用された。その履修表では、「一般者及教員志望者」に分けて履修科目の単位が示され、さらに備考には「「教員志望」は特別教科教員養成課程の者を含む」と記される（東京芸術大学 2004, p.160-162）。1956（昭和 31）年の「学則」では、以下の通り改正される（東京芸術大学 2004, p.171-172）。

第四十三条中

音楽学部	688 名
作曲科	60 名
声楽科	240 名
器楽科	200 名
指揮科	8 名
楽理科	100 名
邦楽科	80 名

とあるを

音楽学部	688 名
作曲科	40 名
声楽科	200 名
器楽科	160 名
指揮科	8 名
楽理科	80 名
邦楽科	80 名
（音楽教員養成課程）	120 名

翌年の 1957（昭和 32）年には、以下の通り、若干の定員の修正が行われる（東京芸術大学 2004, p.172）。

第四十三条中

音楽学部	688 名
作曲科	40 名
声楽科	200 名
器楽科	160 名
指揮科	8 名
楽理科	80 名
邦楽科	80 名
（音楽教員養成課程）	120 名

とあるを

音楽学部	848 名
作曲科	60 名
声楽科	200 名

器楽科	300名
指揮科	8名
楽理科	80名
邦楽科	80名
(音楽教員養成課程)	120名

1960(昭和35)年の「学則」では、以下の通り、改正される(東京芸術大学 2004, p.174-175)

第二条2 学部の学科および課程は次のとおりとする。

(中略)

音楽学部 作曲科  
 声楽科  
 器楽科  
 指揮科  
 楽理科  
 邦楽科

(特別教科教員養成課程)

第二十条 学生の定員は次のとおりとする。

学部	学科	入学定員	学生定数
音楽学部	作曲科	20	80
	声楽科	60	240
	器楽科	85	340
	指揮科	2	8
	楽理科	25	100
	邦楽科	20	80
	計	212	848

注 特別教科教員養成課程(音楽科)として入学定員30名音楽学部を含む。

表2 募集科目とその人員 1956(昭和31)年度

		一般課程	教員課程	計
作曲科		10	5	15
声楽科		50	10	60
器楽科	ピアノ	12	5	19
	オルガン	2		
	弦楽器	18	3	21
	管打楽器	10	2	12
楽理科		20	5	25
邦楽科		20		20
計		142	30	172

出典 『東京芸術大学百年史 音楽学部篇』音楽之友社, 2004年, p.217。

「教職課程(教員養成課程)」「特別教科教員養成課程」「(音楽教員養成課程)」「教員課程」と表記はまちまちであるが、定員は30名となっている。しかし、表3から、30名の

入学生はおらず、最大で 19 名である。1952（昭和 27）年，1953（昭和 28）年の入学生はおらず，1954（昭和 29）年に楽理を専門とする 4 名が入学する。1955（昭和 30）年に 19 名と増加し，声楽を専門とする学生が 7 名（36.8%）も占める。1961（昭和 36）年，10 名と減り，1966（昭和 41）年に 3 名の学生が最後となる。資料に残っている 1958（昭和 33）年に着目すると，作曲は 2 名の志願者で入学者は 0 名。声楽は 29 名の志願者で入学者は 7 名。鍵盤楽器は 30 名の志願者で入学者は 6 名，弦楽器は 5 名の志願者で入学者は 2 名。金管打楽器は 1 名の志願者で入学者は 1 名，木管楽器と楽理の志願者はいなかった。総括すると，志願者は 67 名もあり，入学できたのは 16 名と絞られていた。声楽と鍵盤楽器の人気の高い。

次にカリキュラムについて検討したい。表 2 の「備考」には以下の通り，記される（東京芸術大学 2004，p.217）。

1. 教員課程の者は，入学後憲法（2 単位）及び教職科目（10 単位）が課せられるが，その他の科目は一般課程の者と同じである。
2. 一般課程と教員課程とを併せて志願することはできない。又同一課程に於ても 2 つの科又は専攻を併せ志望することはできない。
3. 教員課程の卒業生は中学校教員 1 級普通免許状と高等学校教員 2 級普通免許状が受けられるが，一般課程の者も憲法及び教職科目を併修すれば上記の免許状を受けることができる。

『履修簿』には以下の通り，示される（東京芸術大学 2004，p.599）。

教員コースに於ける所定単位

教員課程及一般課程の者で教員コース（中学 1 級・高校 2 級教員免許状が与えられる）を取る者は次の A・B・C 3 系列の各所定の単位を修得しなければならない。

A. 教職に関する専門課程

科目	単位	合計
教育原理（含教育史）	4	10
教育心理（含青年心理）	2	
音楽教育法	2	
音楽教育実習	2	

B. 教科に関する専門科目

	教員課程者		一般課程者	
	合唱	独唱	独唱	器楽
作曲科	4			
声楽科				
ピアノ	4	2	2	
オルガン	4	2	2	
弦管打	2	2	2	
楽理科	4		2	2

C. 一般教育科目

一般教育科目中社会科学系列の中から法学 4 単位

（日本国憲法を含む 2 単位）を必ず 12 単位の内に含めて履修すること。

このように教員課程では、日本国憲法2単位、教職科目10単位が必修とされ、卒業の際に中学校1級免許状と高等学校2級普通免許状が取得できた。教科に関する専門科目に関しては、声楽に関する単位がプラスされている。

表3 東京芸術大学特別教科（音楽）教員養成課程の入学者

	作曲		声楽		鍵盤楽器		弦楽器		木管楽器		金管打楽器		楽理		計
	定員	入学	定員	入学	定員	入学	定員	入学	定員	入学	定員	入学	定員	入学	
1952	5	0													0
1953															0
1954														4	4
1955		5		7		3								4	19
1956		2		11		2		1						3	19
1957		2		6		8		3							19
1958				7		6		2			1				16
1959	5	1	7	11		2		3							17
1960	5		7	10		4		3		1				1	19
1961				4		2		1		1		2			10
1962	5		7	3	7	2	6	4		1		1		1	12
1963				3		2		1				1			7
1964	5		7	5	7	1	6	1		1					8
1965	5		7	2	7	1	6	1		1		1			6
1966				2		1									3

出典 『東京芸術大学百年史 音楽学部篇』音楽之友社、2004年、pp.1240-1250 から作成。

1956(昭和31)年度の特別教科（音楽）教員養成課程の試験科目と課題曲を見てみたい。ここでは、声楽科とピアノ科に限定して取り上げる。下線は、特別教科（音楽）教員養成課程の受験生のみに課せられた課題である（東京芸術大学2004、pp.219-226）。

#### 声楽科

##### [声楽]

##### 第1回

(1) 【自由曲】課題曲として次にあげられた20曲以外のものを1曲、暗譜で歌わせる。

(2) F.Wüllner: Chorübungen Iの中から試験の際指定して歌わせる。

##### 第2回

(1) 【自由曲】第1回の(1)に歌ったものと同一曲を歌わせる。

(2) 【課題曲】次のイタリア歌曲群(10曲)とドイツ歌曲群(10曲)のうち、何れの歌曲群を選ぶかは受験生の自由とし、その受験生が選んだ歌曲群の中から試験の際大学が2, 3曲指定する。その指定した曲の中から受験生は1曲を選び、暗譜で歌うことになる。

##### [ピアノ]

(1) 音階のNr.39の中から当日指定する。但し速度は♩=80以上で暗譜のこと。

(2) Mozart : Sonate G-dur K. Nr. 283 第1楽章

(3) Bach : Inventions a 3 voix の中から各自の自由選択

[聴音]

旋律の書取

[学科]

国語，社会，外国語

ピアノ科

[声楽]

【課題曲】 次のイタリア歌曲群（10曲）とドイツ歌曲群（10曲）のうち，何れの歌曲群を選ぶかは受験生の自由とし，その受験生が選んだ歌曲群の中から試験の際大学が2，3曲指定する。その指定した曲の中から受験生は1曲を選び，暗譜で歌うことになる。

[唱歌]

F. Wüllner : Chorübungen I の中から試験の際指定する。

[ピアノ]

下記の曲はいずれも暗譜で演奏のこと。

第1回

Weber : op. 39 Sonate Nr. 2 As 終楽章

第2回

(a) Bach : Wohltemperiertes Klavier Band II 中より Präludium und Fuge Nr. 19 A-dur

(b) 下記2曲の中当日1曲指定する。

Chopin op. 36 Impromptu Nr. 2 Fis-dur

Chopin op. 51 Impromptu Nr. 3 Ges-dur

[聴音]

旋律の書取， 和声の書取

[学科]

国語，社会，外国語

声楽を主とする学生にはバッハ（Bach, Johann Sebastian, 1685-1750, 独）のインベンシヨンのピアノ課題が追加され，ピアノを主とする学生にはイタリア歌曲ないしはドイツ歌曲の声楽の課題が追加されている。音楽教員には声楽もピアノも重要であるということが入学試験の内容にも反映されている。

以上，東京芸術大学の特別教科（音楽）教員養成課程は，音楽学部設置されたこともあり，その特性を活かし，声楽科や器楽科等の専門の学科に分かれて学生が配属された。1967（昭和42）年と先頭を切って廃止されたが，1962（昭和37）年に東京学芸大学に特別教科（音楽）教員養成課程が設置されたことも起因していると考えられる。

## 2. 大阪学芸大学



大阪学芸大学は、1949（昭和24）年6月、大阪第一師範学校（天王寺，平野）および大阪第二師範学校（池田，富田林）を包括し、開学する。開学当初は、天王寺，池田，平野の分校があり、小学校教諭養成の2年課程および4年課程，中学校教諭養成の2年課程および4年課程が設置された。特別教科（音楽）教員養成課程は、1952（昭和27）年，天王寺分校に設置された。定員は1学年30名で、1956（昭和31）年度までは、3年次編入も実施していた。1953（昭和28）年度以降は、「声楽専攻，ピアノ専攻，各種管弦打楽器専攻，作曲専攻等」の専攻ごとの専門教育を展開した（大阪学芸大学1964，p.238）。『大阪学芸大学15年史』（1964，p.238）には、特別教科（音楽）教員養成課程の設置の状況について以下のように記される。

昭和27年4月，文部省の要請により，東京芸術大学音楽部と本学とに，主として高等学校音楽科教員養成のための特設音楽課程が設置されることになった。定員は1学年30名で，初年度は1年および3年編入を募集し，第2年度に完成させることになった。教授陣容も従来のままでは，とうてい運営ができなくなってきたので，まず，顧問格として，わが国音楽教育界の権威者で当時東京芸術大学音楽部の教授であった城多又兵衛氏を兼任教授として迎え，さらに関西楽壇一流のメンバーをそろえるべく努力を重ねた。

城多又兵衛（1904-1979）は，東京音楽学校，東京芸術大学音楽学部にて1933（昭和8）年から1950（昭和25）年5月まで在職した（東京芸術大学百年史編集委員会2003，p.1555）。城多は，師範学校が官立専門学校程度に昇格された際に発行された国定の文部省『師範音楽 本科用巻一』（1943）の編纂者であり，主に聴覚訓練や歌曲の分野を担当していた（鈴木2006，p.90）。大阪学芸大学には1952（昭和27）年10月に兼任教授として着任し，1958（昭和33）年4月には非常勤講師となり，1963（昭和38）年3月まで在職した（大阪学芸大学1964，p.240）。城多は1956（昭和31）年3月から1961（昭和36）年3月まで，愛媛大学教育学部教授も務め，特別教科（音楽）教員養成課程の立ち上げの中核的な存在であった（愛媛大学1999，p.252）。

また，表4に示した通り，20名の専任教員が置かれ，教員組織も拡大した。

表4 大阪学芸大学専任教員組織

氏名	就任	専門
阿保 寛	1949	
市来崎 義子	1953	声楽
	1963	声楽
上畠 力	1950	音楽美学・音楽史
上原 一馬	1958	ピアノ
瓜原 一勲	1949	声楽・音楽科教育
榎本 正	1953	合唱
加藤 直四郎	1961	クラリネット
	1950	声楽・音楽科教育
喜田 賦	1950	
木本 治子	1953	ピアノ
高井 節	1951	声楽
谷沢 芳子	1950	ピアノ・音楽科教育
津村 トシ	1953	ヴァイオリン

子	1956	ピアノ
永野 保治	1949	声楽
郎	1951	作曲・音楽理論
野間 太郎	1952	ピアノ
藤井 敬子	1953	ピアノ
宮田 和	1952	声楽
山県 茂太		
郎		
山田 康子		
横井 和子		
城多 又兵衛		

注 下線：大阪第一師範学校，大阪第二師範学校から異動。

出典 『大阪学芸大学 15 年史』1964 年，p.240 から作成。

表 5 は，大阪学芸大学特別教科（音楽）教員養成課程の専門科目の単位数である。専門性を高めるために「声楽専攻，器楽専攻，作曲専攻」に分かれてカリキュラムが組まれている。教育職員免許法では 32 単位以上であるのに対し，65 単位と倍近く上乘せされている。

表 5 大阪学芸大学特別教科（音楽）教員養成課程専門科目 1954（昭和 29）年

声楽専攻	器楽専攻	作曲専攻	1 年	2 年	3 年	4 年	計
声楽	器楽	理論	4	4	6	6	20
器楽	声楽	器楽	2	2	4	4	12
理論	理論	声楽	2	2	2	2	8
合唱，合奏，ソルフェージュ			4	4	4	4	16
音楽史				4	(2)		4 (2)
音楽美学					2		2
音響学・音声学					3		3
計			12	16	21 (2)	16	65 (2)

出典 上原一馬『日本音楽教育文化史』1988 年，p.434 から作成。

創設当時の校舎は，大阪第一師範学校の音楽教室および大阪第一師範学校寄宿舎を改造した校舎を使用していたが，老朽化していた。文部省に要求を出し，1964（昭和 39）年に池田分校内に鉄筋コンクリート造 4 階建，延 450 坪，総工費約 3,600 万円の校舎が完成した。校舎には，合唱教室 1，講義室 2，研究室 12，練習室 24，楽器格納室 1 が設けられた（大阪学芸大学 1964，p.239）。

このように大阪学芸大学では東京芸術大学教授であった城多又兵衛を迎え，特別教科（音楽）教員養成課程を整備していった。東京芸術大学とは異なり，師範学校の貧弱な施設・設備からスタートし，苦労も多かったと推察されるが，単科の教員養成大学であったことで，1 年次から音楽の専門教育が実施できたため，カリキュラムの面では課題が少なかったと考えられる。

### 3. 北海道学芸大学

北海道学芸大学特別教科（音楽）教員養成課程については、北海道大学教育学部音楽科から再編された、特異なケースである。この点については、前川公美夫『北海道教育史』（1995）において取り上げられている。資料としては、『北大百年史 部局史』（1980）、『北海道教育大学札幌分校百年記念誌』（1987）が挙げられる。

1949（昭和24）年5月、「国立学校設置法」が公布され、北海道大学に教育学部が設置される。伊藤吉之助法文学部部長が教育学部長を兼任し、城戸幡太郎（1893-1985）は創設委員会の委員として学部づくりにあたり、以下のプランを描く（北海道大学1980, p.380）。

#### 第一部（教育科学科）

教育計画学科

教育史学科

産業教育学科

生活教育学科

社会教育学科

学校教育学科

教育制度学科

特殊教育学科

衛生教育学科

教育施設学科

#### 第二部（教育技術科）

芸術学科

体育学科

職業学科

家政学科

しかし、文部省の了解を得られず、「教育学科」のみの単一の学科となり、上記のプランは講座として反映された。具体的には下記の8講座が開設される。

1949（昭和24）年 教育史学講座

1951（昭和26）年 社会教育講座，教育計画講座

1952（昭和27）年 特殊教育講座，産業教育講座

1953（昭和28）年 生活教育講座

1954（昭和29）年 学校教育講座

1957（昭和32）年 教育制度講座

また、1952（昭和27）年の教育課程を見ると、以下の6専攻が設けられている（北海道大学1980, pp.414-419）。

教育科学専攻

体育専攻

音楽専攻

職業教育専攻  
家庭教育専攻  
養護教育専攻

音楽専攻を新設した背景について、城戸は次のように回想する（城戸 1978, pp.185-186）。

わたくしが正式に就任したのは1年あまり後のことで、その間にわたしは北海道の文化として将来何を発展させるべきかについて何人かの芸術家や学者に集まってもらって話し合いの会をやりました。そのとき、東京音楽学校の教授であった遠藤宏氏が、これからの北海道の文化は音楽を発展させるべきだと言われました。

わたしも東大で美学や美術史の講義は聴きましたが、音楽の美学や歴史についての講義はありませんでした。これは片手落ちだと考えていましたので、北大の教育学部が率先して音楽の講座を設けたらと思い、遠藤氏に「あなたが来てやって頂けないか」ときいたら、「北大でやる気があったら、やってもよい」と言われました。そこでわたくしは決心して遠藤氏に人選を頼んで、「音楽学科」を発足させることにしました。

文部省はこの案を認めませんで、正規の学科とも講座ともすることができません。しかしわたしは大学が認めればそれでよいと思って、「音楽専攻科」として学生を募集したところ、希望者がかなりあって嬉しく思いました。

文部省に何とか学科か講座として認めさせたいと重い、日高第四郎さんが文部次官であったとき、奥さんが音楽学校出身でもあり、音楽には理解があると思って直接談判をしたことがありました。日高さんは、正式には認められないが大学がやるならやるなどとは言わない、という消極的な好意を示されたので継続してやることにしました。しかし、わたくしが定年で退職すると、文部省は北大の教育学部の音楽専攻を北海道学芸大学に移管してしまいました。文部省には認められなくても、このときの音楽専攻のなかから、現在、音楽や音楽教育で活躍している人が出ていることは嬉しいことですし、また卒業式で声学の村井満壽教授が学生の伴奏で「蛍の光」をうたってくださったこともなつかしい思い出です。

1952（昭和 27）年の音楽専攻の教員は、下記の通りである（北海道大学 1980, p.420）。

音楽教育講座

教授 遠藤 宏（音楽学）

音楽技術講座

教授 高折 宮次（ピアノ）

助教授 村井 満壽（声楽）

助教授 筒井 秀武（ピアノ，チェロ）

助手 今堀 美智子

ここで注目すべき点は、東京音楽学校教授であった遠藤宏（1894-1963）、高折宮次（1893-1963）が着任している点である。東京音楽学校に遠藤は1934（昭和 9）年 9 月から 1946（昭和 21）年 8 月まで、高折は 1915（大正 4）年から 1946（昭和 21）年 9 月まで在職した（東京芸術大学百年史編集委員会 2003, p.1550,1563）。中でも高折は、師範学校が官立

専門学校程度に昇格された際に発行された国定の文部省『師範器楽 本科用巻一』(1943)の編纂者でもあった(鈴木 2006, p.90) ii。

音楽専攻のカリキュラムは、表6の通りである。当時の一般的な音楽教員養成課程では、声楽やピアノ等の実技が中心であったのに対し、東京帝国大学文学部美学科出身の音楽学者の遠藤がいただけあって、音楽理論、音楽史、音楽美学等が必修科目に置かれていた。中でも音楽史に関しては、「一般音楽史概論」「東洋日本音楽史」「教育音楽史」と充実している。当時、西洋音楽が中心であることが多かったのに対し、東洋や日本も取り上げられていた点は着目に値する。

表6 音楽専攻のカリキュラム

		単位
必修科目	音楽通論(楽典)	1
	音楽科学概論	2
	音楽理論並に演習(和声学)	2
	音楽理論並に演習(対位法)	2
	音楽理論並に演習(楽式論)	2
	作曲学演習	4
	音楽史(一般音楽史概論, 東洋日本音楽史, 教育音楽史を含む)	8
	音楽美学鑑賞論	4
	音楽教育法並に実習	4
選択科目	一般美学芸術学	2
	詩歌学	2
	外国語及外国文学	4
	国文学	2
	音声学	2
	音響学	2
	楽器論	2
	管弦楽法	2
	指揮法	2
実技必修科目	○実技第一類(器楽)	
	器楽を主とするもの	10
	声楽	5
	器楽演習	4
	合唱, 合奏, 指揮実習	5
	○実技第二類(声楽)	
	声楽を主とするもの	10
	ピアノ	5
	声楽実習	4
	合唱, 合奏, 指揮実習	5

出典 『北大百年史 部局史』1980年, pp.415-416。

第二期生で、北星学園女子短期大学名誉教授の黒川武は、次のように回想する(北海道大学 1980年, p.381)。

北大で音楽専攻の学生をとるといっているので、音楽をやりたいがとても当時の状況で東京にはいけないと思っていた私たちは大喜びで応募しました。入学を許可されたのは12名で、文組5組に体育専攻生、ほかの文系学生とともに入りました。私たちは第二期生で、第一期生には北大予科から来られた広瀬量平さんひとりがおりました。教室は、

いまは取りこわされてなくなっていますが、クラーク会館前にあった大きい古い中央講堂を間仕切りしてつくられ、最初はスタインウェイの古いピアノが1台あるきりでした。しかし、教官も学生たちも、北海道から新しい音楽文化の花を咲かせるのだと清新な気持ちで毎日をすごしました。城戸先生のギリシャの教育の中心は音楽と体育だったという講義に胸をおどらせたものです。カリキュラムが整備されていなかったもので、学生は自分たちで学習プランをつくり、次の年入った3台のピアノを奪い合うようにして練習しました。第一期生の広瀬さんはいまは国際的に高い評価をうけている作曲家で、1975年には「尺八協奏曲」を発表し、作曲家に与えられる最高の賞と言われる「尾高賞」を得ています。

しかしながら、文部省は、音楽専攻、体育専攻の制度を認可せず、別枠での学生募集は3年間で中止となり、北海道学芸大学札幌分校に特別教科（音楽）教員養成課程が1956（昭和31）年に設置されるに及んで、1959（昭和34）年頃までに音楽担当の教員は、以下の通り、北海道学芸大学に配置換えとなった（北海道教育大学1987，p.202）。

1956（昭和31）年 遠藤 宏，高折 宮次

1957（昭和32）年 村井 満寿

1959（昭和34）年 筒井 秀武

なお、北海道学芸大学札幌校には、北海道第一師範学校から異動した、次の3名の教員がいた（北海道教育大学1987，pp.453-454）。

千葉日出城 1938（昭和13）年～

横谷 英次 1946（昭和21）年～

工藤 健次 1948（昭和23）年～

繰り返しとなるが、北海道学芸大学の特別教科（音楽）教員養成課程は、北海道大学教育学部音楽科から再編された特異なケースである。城戸幡太郎の壮大な構想により組織され、東京音楽学校を一斉退官した、遠藤宏や高折宮次が教授陣に加わっていた。

#### 4. 島根大学

地元の熱心な誘致運動が伴って、特別教科（音楽）教員養成課程が設置された事例として、島根大学を挙げたい。資料としては、師範学校の開設から島根大学までの変遷を音楽の視点で編纂された『島根大学教育学部特設音楽課程30周年記念 My Onken History』（1985）があり、貴重な資料である。その他、『島根大学史』（1981）『島根大学史 第二巻』（2003）においても特別教科（音楽）教員養成課程が取り上げられている。

1949（昭和24）年、島根大学は、以下の通り新制大学として発足した。

島根師範学校（松江，浜田）→教育学部

島根青年師範学校（出雲）→教育学部

松江高等学校（松江）→文理学部

1950(昭和25)年4月、出雲分教場は松江本校に統合、1952(昭和27)年4月、浜田分校は廃止された。当初、教育学部は、島根師範学校男子部のあった外中原校舎を使用していたが、1954(昭和29)年に音楽科が松江高等学校のあった河津校舎に移転し、その後、逐次移転し、1962(昭和37)年に河津校舎の移転を完了する。

特別教科(音楽)教員養成課程新設の発端について、『島根大学史』において次のように記される(島根大学1981, p.388)。

昭和26年(1951)、当時内地研究員として東京芸術大学で研修中であった森山俊雄講師(当時)から次のような連絡があった。それは文部省が全国を5ブロックに分け、各ブロックの1大学に特別教科教員養成課程を設ける計画があるということであった。そこで、教育学部では音楽教員の養成を目的とする特設課程の設立を企画し運動を進めることになった。音楽科では発足以来竹内尚一教授を中心として、松江のほか県内近県にかけて演奏活動を続けており、島大音楽科の評価は高かった。

そして、以下の通り、文部省へ陳情が重ねられる。

1952(昭和27)年1月 池田福広事務局長と竹内尚一教授  
1952(昭和27)年2月 竹内教授  
1952(昭和27)年5月 勝部謙造学部長と松田俊雄学部事務長  
1952(昭和27)年6月 勝部学部長と松田学部事務長  
1952(昭和27)年9月 竹内教授ら音楽科教官  
1952(昭和27)年10月 竹内教授ら音楽科教官

しかしながら、音楽関係の設備・教授陣容が不十分との理由から認可の見通しは得られなかった。そこで設立運動を一層強力に推進することを期して、1952(昭和27)年11月、「教育学部振興期成同盟会」が設立される。この時期、広島大学教育学部でも特別教科(音楽)教員養成課程設立の動きがあり、対抗が予想され、設備面での充実が早急に望まれた。具体的には次の取り組みがなされた。

- ・1952(昭和27)、1953(昭和28)年度の設備充実費は、ピアノ購入に充てられた。
- ・目標を630万円と定めた募金の実施。
- ・演奏会の開催

その結果、島根県から200万円が支出され、募金は総額544万8千円も集められた。募金により、ピアノ10台が発注される。その他、1952(昭和27)年、「父兄会」も設立され、設立運動を支えた。陳情も以下の通り、引き続き続けられた。

1952(昭和27)年11月 勝部学部長と松田事務長  
1953(昭和28)年3月 勝部学部長と松田事務長  
1953(昭和28)年11月 勝部学部長と田部長右衛門期成同盟会会長

このような努力の結果、1953(昭和28)年12月、文部省福岡事務官の来学視察を受け、



1954（昭和 29）年 3 月，学部長と事務長が上京して最後の折衝を行い，4 月，課程が設置されることが認可された。

1953（昭和 28）年 6 月に松江高等学校があった河津校舎に 207.9 坪の音楽棟が新築され，その後 12 月，121 坪が増築された。100 名収容の合奏用大講義室，レッスン室，30 室を数える練習室等を完備し，当時では珍しい防音壁が用いられた。1962（昭和 37）年 1 月に配付された『日本教育大学協会第二部音楽部門中国地区連合協議会資料』における島根大学の音楽教育施設を一覧にしたものが，表 7 である。また，表 8 には専任教員組織を一覧とした。施設・設備，教員ともに着実に整備されていったことが分かる。

表 7 島根大学の音楽教育施設

施設・設備	
研究室（数）	11
教室（数）	2
練習室（数）	42
総建坪（坪）	328
ピアノ（数）	62
オルガン（数）	7
管楽器（数）	41
弦楽器（数）	32
打楽器（数）	19
蓄音器（数）	3
テープレコーダー（数）	3
レコード（枚）	1200
図書（冊）	800
楽譜（冊）	3000

出典 『日本教育大学協会第二部音楽部門 中国地区連合協議会資料』1962 年。

表 8 島根大学専任教員組織

氏名	就任	備考
長岡 敏夫	1943	～1981
森山 俊夫	1946	～1985
後藤 忠雄	1949	～1952
竹内 尚一	1950	
竹内 文子	1950	～1977
藤原 千代	1951	～1960
子	1952	～1954
伊藤 雯子	1954	～1962
坂本 良隆	1954	～1958
与倉 愛子	1954	～1976
大原 豊彦	1956	～1968
千蔵 八郎	1956	
小林 昭三	1956	～1960
渡部 毅	1958	
西岡 光夫	1958	～1959
小沢 京子	1959	～1976
山本 力	1959	
藤井 文子	1960	～1969
蔵 清蔵	1960	～1966
庵原 順子	1962	
知念 辰朗	1968	～1983
水野 信男	1968	



吉田 功	1968	～1980
日野 圭一	1972	
吉名 重美	1976	～1981
西園 芳信	1976	
手塚 実	1977	
三原 重行	1981	
島畑 斉	1982	
大久保 佐知子	1982	
	1985	
田中 昭		
久納 慶一		

注 下線：島根師範学校から異動。

出典 『My Onken History』1985年，pp.24-106 から作成。

以上，島根大学では地元の熱心な誘致運動の支援を受け，熱心に文部省に陳情することで特別教科（音楽）教員養成課程が新設された。松江の誇りともなり，島根大学の前を通る観光バスのバスガイドもマイク片手に音楽教室の近況を誇らしく説明していたこともあった（西岡 1966，p.114）。

## おわりに

戦後，楽壇戦犯論争が起こり，1946（昭和 21）年 8 月，東京音楽学校の教授陣の大部分は一斉に退官する。その際退官した，井口基成（1908-1983）や伊藤武雄（1905-1987）らによって，「子供のための音楽教室」，さらには桐朋音楽大学が誕生したことは知られている（中曽根 2001，pp.32-39）。同様に，特別教科（音楽）教員養成課程の立ち上げには，高折宮次，遠藤宏らの東京音楽学校の退官した教授陣が関与していた。類似した組織であった，新潟大学教育学部芸能学科では伊藤武雄，広島大学教育学部福山分校音楽科では木下保（1903-1982）がかかわった。中でも城多又兵衛は，大阪学芸大学，愛媛大学等と複数の特別教科（音楽）教員養成課程の立ち上げに協力していた。このように特別教科（音楽）教員養成課程も東京音楽学校を一斉退官した教授陣の受け皿となったのである。そして師範学校を前身とする新制大学において，東京芸術大学の教育内容の実現を試みようとしたのである。

教員養成としての実績に関しては，1976（昭和 51）年の教職への就職率では，北海道教育大学 30%，東京学芸大学 25%，新潟大学 50%，大阪教育大学 30%，島根大学 50%，愛媛大学 65%，宮崎大学 65%であった（上原 1976，p.77）。都市部での就職率が低い，教員採用が厳しくなったことだけが要因ではなく，在籍する学生たちの教職に対する意識が低かったことも起因する。平野潤子は「私自身も大学時代に教育のことにそう熱心にもやらなかったし，私は特設科ですけど，30 人いるうちに，入学当初に教員になりたいって入ったという人は 3 人しかいなかったですね。あとの人は妥協であるとか，音楽の勉強をしたいから大学に入ったという意識だから，難しいですね」と回想する（平野 1976，p.112）。

入学試験に関しては，当然のことながら音楽実技試験が課せられていた。1966（昭和 41）年の『音楽大学・学校案内』に基づく，国語，社会，数学，理科，外国語の 5 教科が課せられていたのは，大阪教育大学と宮崎大学であった。4 教科が課せられていたのは，北海道教育大学，東京学芸大学，新潟大学。3 教科のみだったのは，山形大学，島根大学，愛媛大学であり，各校によって取り扱いが異なった（音楽之友社 1966）。

表 9 は，かつて特別教科（音楽）教員養成課程が置かれていた大学の現在の組織を整理

したものである。参考までに 1972（昭和 47）年の音楽教員数も列記した。北海道教育大学を除き、音楽教員数は半減している。山形大学では、課程認定で必要とされる最低人数まで削減されている。教員養成に特化しない組織となっているのは、北海道教育大学岩見沢校の芸術・スポーツ文化学科と大阪教育大学教育協働学科である。

特別教科（音楽）教員養成課程で確立されたことの一つに、個人レッスンの保障であった。そのために、専任、非常勤の教員が多数配置された。今日の国立教員養成大学・学部では、人件費削減のため、この点が保証されにくくなってきている。音楽技能の習得のためには個人レッスンは有効な方法ではあるが、今後の教員養成においてこの課題をどのように解決するかについても議論が必要だろう。

本稿では師範学校から新制大学への再編の中での特別教科（音楽）教員養成課程の萌芽に着目して検討した。今後は、特別教科（音楽）教員養成課程設置に伴う、地域の音楽文化の振興にも対象を広げ、検証していきたい。

表 9 現在の組織

大学名	音楽教員数		現在の組織
	1972 年	2019 年	
北海道教育大学	25	25	札幌校、旭川校、釧路校：教員養成課程， 岩見沢校：芸術・スポーツ文化学科
山形大学	11	4	地域教育文化学部地域教育文化学科文化創生コース
東京学芸大学	22	16	初等教育教員養成課程，中等教育教員養成課程
新潟大学	9	6	学校教員養成課程
大阪教育大学	20	12	学校教育教員養成課程，教育協働学科芸術表現専攻
島根大学	13	5	学校教育課程
愛媛大学	9	6	学校教育教員養成課程
宮崎大学	10	5	学校教育課程

出典 教員養成学部教官研究集会音楽科教育部会『音楽科教育の研究』1972 年，pp.197-198。『日本教育大学協会全国音楽部門大学部会会報』第 44 号，2019 年，pp.56-82 から作成。

## 謝辞

本稿を作成するにあたり、上越教育大学名誉教授の山形忠顕先生から資料の提供を得ました。ここに記して、感謝の意を表します。

## 付記

本稿は、日本音楽教育学会第46回大会（2015年、於：シーガイアコンベンションセンター）で口頭発表した内容の一部を再検討し、加筆・修正を行ったものである。

本研究は、2014（平成26）年度鳥取大学学長経費（教育・研究改善推進費）「特別教科（音楽）教員養成課程による地方への音楽教員養成拡大と音楽文化波及」の助成を受けた。

## 引用文献

- 上原一馬（1976）「特別教科（音楽）教員養成課程の現状：その問題点と改善策」『季刊音楽教育研究』第19巻第2号、音楽之友社。
- 上原一馬（1988）『日本音楽教育文化史』音楽之友社。
- 愛媛大学50年史編集専門委員会（1999）『愛媛大学五十年史』。
- 大阪学芸大学（1964）『大阪学芸大学15年史』。
- 音楽之友社編（1966）『音楽大学・学校案内 昭和42年度』音楽之友社。
- 城戸幡太郎（1978）『教育科学七十年』北海道大学図書刊行会（大泉溥編『日本の子ども研究：明治・大正・昭和 別巻IV城戸幡太郎と日本の教育心理学』（2010）クレス出版）。
- 木村信之（1993）『昭和戦後 音楽教育史』音楽之友社。
- 島大音研誌編集委員会編（1985）『島根大学教育学部特設音楽課程30周年記念 My Onken History』。
- 島根大学開学三十周年史編集委員会編（1981）『島根大学史』。
- 島根大学開学五十周年記念誌編集委員会編（2003）『島根大学史 第二巻』。
- 坂本麻実子（2006）『明治中等音楽教員の研究：『田舎教師』とその時代』風間書房。
- 鈴木慎一郎（2003）「高等師範学校、女子高等師範学校における音楽教員養成：東京女子高等師範学校、広島女子高等師範学校での＜体育・音楽教員養成＞を中心として」『関西楽理研究』20号、関西楽理研究会。
- 鈴木慎一郎（2006）『昭和前期の師範学校における音楽教育実践に関する史的研究』兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士論文。
- 鈴木慎一郎（2006）「戦前における音楽教員養成の独自性：美術・体育との比較から」『芸術教育実践学7』芸術教育実践学会。
- 鈴木慎一郎（2019）「5-2 教師教育の課題3 音楽教育養成史の研究動向と課題」日本音楽教育学会編『音楽教育研究ハンドブック』音楽之友社。
- 東京芸術大学百年史編集委員会編（2004）『東京芸術大学百年史音楽学部篇』音楽之友社。
- 中曽根松衛（2001）『音楽界戦後50年の歩み：事件史と音楽家列傳』芸術現代社。
- 西岡光夫（1966）「わが校を語る 松江の誇り」『音楽大学・学校案内』音楽之友社。
- 日外アソシエーツ編集部編（2010）『新撰芸能人物事典 明治～平成』日外アソシエーツ。
- 林三平（1971）「制度転換期における教員養成の実施状況と再編成構想」海後宗臣監修・編『教員養成《戦後日本の教育改革第八巻》』東京大学出版社、pp.415-440。
- 平野潤子（1976）「特集・音楽科教員養成課程 若い教師と大学教員養成課程 座談会」『季刊音楽教育研究』第19巻第2号、音楽之友社。

船木俊雄・無試験検定研究会編（2005）『近代日本中等教員養成に果たした私学の役割に関する歴史的研究』学文社。

北海道教育大学札幌分校（1987）『北海道教育大学札幌分校百年記念誌』。

北海道大学（1980）『北大百年史 部局史』。

前川公美夫（1995）『北海道音楽史』亜璃西社。

室井摩那子（2013）『わがままだって、いいじゃない。92歳のピアニスト「今日」を生きる』小学館。

山形大学創立 50 周年記念誌発行実施委員会編（1999）『山形大学 50 年史』。

## 注

---

<sup>i</sup> この点については、『愛媛大学五十年史』（1999, p. 243）に丁寧に記され、愛媛大学では「特別教科教員養成課程音楽科」から「特別教科（音楽）教員養成課程」へと変更された。

<sup>ii</sup> ピアニストの室井摩那子は、小学生のとき、高折宮次に師事した（室井 2013, pp. 79-80）。また、高折は、美智子様にもピアノを教えた（日外アソシエーツ 2010, p. 456）。